北京４大学への出張報告

柴田勝二

３月４日より７日まで、「教養日本力」ＧＰの活動の一環として北京に出張し、北京大、北京外語大、北京語言大、北京師範大の四つの大学を訪問した。当初は北京大と北京外語大のみの予定であったが、現地で案内していただいた本学大学院修了生である郭勇氏（寧波大副教授、現在北京大大学院博士課程在籍）と呂毅氏（北京師範大卒、清華大勤務）の尽力により、北京語言大と北京師範大の訪問を急遽受け容れていただいた。両氏には各大学の教員との連絡を緊密に取っていただき、今回の出張の内容を充実させることができた。深く感謝したい。以下は各大学への訪問の内容である。

《北京大学》　　３月５日　　AM9:30~12:00

応接者：李強教授、李奇楠副教授

〇北京大学外国語学院日本言語文化系における教育の概要

北京大学はいうまでもなく清華大学とともに中国を代表する名門大学であり、外国語学院日本言語文化系も、１９４６年の設立以来６０年を超える歴史を有する。現在専任教員が１８名、学部生が各学年で１５～２０名、４学年全体で約７０名という少人数教育が取られ、大学院生は修士課程・博士課程にそれぞれ約２５名が在籍している。日本語教育は１年次には１４コマ（１週、１コマは５０分、以下他大学についてもすべて同じ）の基礎日本語教育がおこなわれ、２年次には基礎日本語１０コマに加えて、日本社会・歴史２コマ、視聴覚４コマの教育がおこなわれている。３年次には上級日本語４コマ、日本文学４コマ、日本文化２コマ、中日通訳・翻訳６コマの授業が組まれている。４年次には上級日本語４コマ、中日翻訳２コマに加えて卒業論文の執筆が必修化されている。教育の理念としては、実用的な日本語の運用能力を身につけさせるだけでなく、学問的な側面も重んじ、日本の語学・歴史・文化に対する認識を満遍なく持たせることが目指されている。

〇学生の関心・進路

学生の日本に関する関心はアニメなど大衆文化への興味が中心的で、経済状況に対する関心も強い。文学については村上春樹など近現代文学の人気が高いが、大学院生には古典文学を専攻する者もいるとのことであった。

学生の進路としては、大学院進学、海外留学、就職がそれぞれ三分の一ずつということであった。海外留学の場合も大学院へ進学することになるので、学生の三分の二が大学院に進学するという状況はさすがに少数精鋭の名門大学ならではのものである。就職先とし

ては日立、トヨタといった日系企業が多く、地元企業に入る場合も、日中交流に関わる仕事に携わることが多いようである。

〇授業の様子

３月５日午前１１時より５０分間の授業を見学させていただいた。学生数は約２０名で、内西洋系の学生（女性）が１名見られた。教師は一橋大学から来ている日本人の教育実習生（女性）であった。プロの教師ではないので、授業を積極的にリードしていくという感じはあまりなく、日本語を使ったゲームを学生にさせているような印象が強かった。

話題は「肉じゃが」をどのように作るかということで、「肉を炒める」と「肉が炒まる」で他動詞と自動詞の区別をさせるといった練習がされていた。あらかじめ出されていた課題が授業時間中にチェックされていたが、少人数であることもあって、一人一人に眼が行き届いていた。学生もきちんと課題をこなしており、レベルの高さを感じさせた。ただ「味を見る」といった比喩的な定型表現などには、もう少し説明を加えてもよいのではと思われた。

〇院生インタビュー

こちらからの依頼で、修士課程の２年の張偉さん（女性）にインタビューさせていただいた。張さんは学部から北京大で、学部生の事情にもよく通じていた。以下はその応答の内容。

「日本語を学ぼうとした動機は何ですか？」

子供の頃からアニメなどで日本文化に親しんでおり、興味があった。同じ動機で日本語を学ぼうとする学生は多いと思う。

「日本文化にはどんなイメージがありますか？」

とても繊細、デリケートなイメージがある。今はアニメだけでなく、武士道や能といった古典文化にも興味を持っている。

「日本語を学ぶ上での難しさは何ですか？」

敬語やカタカナ語がむずかしい。また感情や心情を表現する際に、中国語では「彼女は悲しい」と言えるのに、日本語では言えないといった差異があり、使いこなすことが難しい。

「現在の研究テーマは何ですか？」

日本語学を学んでおり、情報理論に関心がある。

「自分の将来はどのように描いていますか」

将来は日本語の教師になるか、日本語を生かした職業に就きたい。

《北京外国語大学》　　３月５日　　PM1:30~3:30

応接者：応傑副教授、熊文莉副教授、楊炳菁講師

〇北京外国語大学日語系における教育の概要

北京外国語大学は中国国内における外国語教育の最高峰として知られる、重点大学の一つである。英語、日本語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、アラビア語をはじめとする世界各地域の言語の教育・研究がおこなわれており、本学と近似した性格を有する。

北京外国語大学における日本語教育は１９５６年より始められ、８１年には日語系として独立したセクションとなった。日語系における専任教員数は２０名で、学生数は総数約３００名である。大学院は修士課程に各学年１５名程度、博士課程に各学年３名程度在籍している。学部においては、１学年は零起点（未習者）２クラスと高起点（既習者）１クラスより成り、それぞれ別個のカリキュラムが組まれている。たとえば高起点クラスにおいては１年次より会話の授業が組まれているが、零起点クラスでは会話の授業は２年次から始まるといった差違がある。その分零起点クラスでは日本語概説や精読の授業が、それぞれ高起点クラスよりも４コマ分ずつ多く置かれている。これらを含めた１、２年次における「基礎技能」としての日本語の授業は零起点クラスでは各２６コマ、高起点クラスでは２４コマと２０コマが配されている。３年次以降は各教員のゼミに所属して日本の言語・文学・社会・歴史などを学びつつ、中日間の翻訳・通訳の技能を学ぶ授業も重視されている。なお零起点クラスの学生と高起点クラスの学生の力は学年を追うごとに縮まっていくとのことである。

〇学生の関心・進路

学生の関心は近年社会文化の方面が強くなっており、とくに中日の比較文化、比較社会など中日関係に興味を持つ学生が多い。ただそれに対応できる教員は多いとはいえないとのこと。また卒論では文学を選ぶ学生が多く、川端康成、谷崎潤一郎、村上春樹らが人気がある。教員の専門にもよるが、古典では万葉集を対象とする学生がいるとのこと。

〇学生インタビュー

学部３年の樊泽玉さんにインタビューさせていただいた。彼女は高起点クラスの学生である。以下はその応答の内容。

「日本語を学び始めた動機は何ですか？」

日本の伝統文化と戦後の経済成長の関係に興味があり、それを知るために日本語を学ぼうと思った。

「日本語を学ぶ上での難しさは何ですか？」

聞き取りが難しい。同じ発音でも意味が違う言葉が多いので、一度聞いただけでは意味が分からないことがある。また敬語を使いこなすことも難しい。

「日本文化で一番興味があるのは何ですか？」

ポップミュージックやアニメに一番興味がある。宮崎駿の作品はいくつか見て、面白かった。

「カリキュラムや授業に対する要望はありますか？」

経済関係の授業が少ないので、その方面を充実させてほしい。

「将来の希望は何ですか？」

将来は日本語を扱う仕事に就きたい。具体的にはまだ考えていない。

《北京語言大学》　　３月６日　　AM9:30～10:30

応接者：兪暁明教授

〇北京語言大学外国語学院日本語語言文学系における教育の概要

北京語言大学は１９６２年に設立された外国留学生高等予備学校に始まり、６５年に北京語言学院となり、９６年に現在の校名に改められている。外国語学院では英語、フランス語、日本語、ドイツ語、スペイン語、アラビア語、朝鮮語の七つの言語系があり、留学生教育に力を入れていて、水準も高い。留学生としては日本と韓国からの学生が多いようである。

日本語語言文学系は９３年に発足し、専任教員は日本人３名を含む計１６名がいる。学生数は各学年が２クラスで、１クラスは２５～３０名である。教育プログラムの特色としては、１、２年次の教育課程を終えた後、３、４年次は日本での修学を義務づけられていることが挙げられる。とくに北陸大学との提携が確立しており、大半の学生は北陸大に編入して後期の２年間を送るようである。他の留学先としては本学、神戸市外国語大、愛知大などがある。なお留学費は私費でまかなわれるために、経済的な余裕のある家庭の子弟でないと修学が難しいとのことである。

大学院教育にも力を入れており、２００３年より修士課程が発足している。語学、文学、中日同時通訳の三部門があり、一学年８名程度が在籍している。

なお同大学は双方にとって予定外の訪問であったために、くわしいカリキュラムの表などが用意されておらず、概要をうかがうにとどまったが、突然の訪問に丁寧に応じていただいた兪教授には深く感謝したい。

《北京師範大学》　　３月６日　　AM11:00～12:30

応接者：王志松教授、林涛副教授

○北京師範大学外国語言文学学院日語語文専業における教育の概要

北京師範大学は百年余の歴史を持つ重点大学の一つであり、学生数は学部生と大学院生ともに８０００人を超える総合大学である。

日本語教育を担う外国語言文学学院日語語文専業には各学年２０名程度の学生がおり、日本語・日本文化を学んでいる。１、２年次においては基礎日本語に当たる「綜合日語」がそれぞれ週８コマと６コマ配され、あとヒアリング、会話、作文、日本事情などの授業がそれぞれ週２～４コマ置かれている。３、４年次においては翻訳、通訳、上級ヒアリングなどの実践的な授業が組まれ、日本語の高度な運用能力を身につけることが目指されている。それとともに言語、文学、文化、中日関係などのゼミが開講されており、学生は日本と同様にそれらのどこかに所属して卒業論文を執筆することになる。

大学院は年１０名程度の入学者があるが、受験者は５０名程度であり、かなりの難関となっている。部門としては日本文化、日本文学、日本語教育学の三つがあるが、近年は日本語教育を専攻する院生が多いとのことである。

○学生の進路

学生の大学院への進学率は３０～５０％であり、日本語教師を目指す者はやはり大学院に進むことになる。その一方就職を希望する学生も多く、日系企業など就職先は多岐にわたっている。

《総括的感想》

北京市内の四つの大学における日本語・日本文化教育の現況を垣間見させていただいたが、総じてその教育や学生の能力の水準は高いと思われた。北京大学で見学した２年生の授業では、学生はすでに日本語で自分の見解を教師に表現することができ、大学自体のレベルの高さを差し引いても、短期間で修得されている日本語の運用能力の高さには感心させられた。またどの大学でも通訳や翻訳の授業をカリキュラムに組み込んでおり、実践的な日本語の運用能力を鍛えることに対して、意欲的であることがよく分かった。

学生の関心のあり方はどの大学でもさほど変わらないようで、総じてアニメやポップ音楽を通して日本文化に興味を持ち、その後古典芸能などに触れることで知識を拡げるとともに、日本における伝統と現代の落差に気づかされ、その所以を知りたいという関心を生じさせるといった経路を辿ることが多いようである。伝統と現代、中国と日本といった時間・空間的に異質な世界同士の関わりに興味を持つ学生は少なくないようで、こうした「比較」や「関係」を軸とした授業を盛り込むことが今後さらに求められるだろう。本学にお

いても「比較文化演習」という授業が日本人学生に向けて開かれているが、留学生の関心もこうした問題性にあると考えられ、こうした知的関心を満たす授業を提供することが我々にも求められると思われる。